
A.O.G ~ 真剣で代行者に恋しなさい! ~

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A・O・G ～真剣で代行者に恋しなさい！～

【Nコード】

N5712Y

【作者名】

反省猫

【あらすじ】

天錠 暁は、ウサギみたいな生物を助けた事により神と出会う。

そして、神は、暁にある提案をするのだが・・・。

この作品は、真剣で私に恋してる！の設定を使った二次創作作品です。

最強・チート・キャラ崩壊苦手な方、原作が好きな方は、ご遠慮ください。それでもいいよという方は、どうぞ暇つぶしにお読みください。

Prologue 『神の代行者』（前書き）

初投稿です。どうも作者の反省猫です。この作品は、結構原作ブレイクとかしますので、主人公最強です。原作が好きの方は読まない事をおすすめします。それでもいい方は、どうぞ暇つぶしにお読みください。基本バッドエンドとか嫌いなので、ハッピーエンド目指したいと思います。

神様の名前変更しました。ルー師範代と被るので（いまさら！）あと、加筆修正致しました。

Prologue 『神の代行者』

とりあえず、整理してみよう。

俺の名前は、てんじょうつ天錠 あきら暁

アニメとか小説やゲームを愛するまあいわゆるオタクな大学生だ。

ある日、前々からほしかったゲームを買って意気揚々と帰っていると、ウサギのような変な生き物が

子供たちに苛められているのを見かけた。

とりあえず、そのまま見過ごすのも嫌だったので、ちょうど持ってたカードゲームの

レアカードを少年たちに渡すと少年たちは、もらったカードに夢中で

そのウサギもどきに興味が無くなり、その場から去っていた。

苛められていたウサギもどきは、左前足を怪我していたので、とりあえず家に連れて帰り手当てした。

手当てした後に、驚く事が起こった。そのウサギもどきがしゃべり始めたのだ。

ウサギ？

「いやあ、助かりました。あなたは、命の恩人です」

暁

「うお！　しゃ、しゃべった！」

俺は、思わず腰を抜かした。

ウサギ？

「あ、申し遅れました！　私、神の従者をしております稲葉いなばと申します。

以後お見知りおきを　ペコリ」

そう言つと稲葉と名乗つたウサギもどきが丁寧に辞儀をした。

暁

「あ、これは、ご丁寧に俺の名前は、天錠　暁です。よろしく」
暁も正座をし、そう言つて頭を下げた。

稲葉

「それにしても、最近では珍しい正義感を持った人ですね」

暁

「いや、俺はただ見過ごせなかつただけですよ」
そう言つて、謙遜する。

稲葉

「それでも、他の人々は、見て見ぬふりだったのにあなたは、私を助け、手当までしてくれた。本当に感謝いたします」

暁

「いえ、当たり前前の事ですから、頭を上げてください」

稲葉は、じーと暁を見ている。

暁 「な、何か？」

稲葉

「ふむ、あなたなら我、主に合わせてもいいかもしれません」

暁

「主と言うと……か、神様あ……！！！！！！」

稲葉

「はい！ 善は急げと申します。行きますよ」

暁

「行きますよ…… うわぁ……！！」

稲葉にタッチされた瞬間、二人はどこかへ転移した。

暁

「うん……ここは……どこだ？」

暁はどうやら気絶をしていたらしく、目が覚めると見知らぬ部屋の床に横たわっていた。

?????

「クスクスッ……」

誰かの笑い声が聞こえたので、その声のした方向を見ると金髪の可愛らしい女の子が立っていた。

暁
「君は……?」

??
「私は、ルカⅡツヴァイトⅡルミナス。あなたたちが言う処の【神】よ。」

暁
「へ? あなたが神様?」

ルカ
「あ、その神様って呼び方嫌いだから、ルカでいいわ」

暁
「(神っぽくないな)じゃ、ルカで。えーと俺の名前は……」

ルカ
「知ってるわ。天錠 暁でしょ? そうねー、私はアキラと呼ぶは?」
そう言つて、暁を品定めする目で全身を見て

ルカ
「んー……合格!(^^)」

暁
「へ? 何が合格?」

ルカ
「まどろっこしい事は嫌いだから単刀直入に言うわ、
あなた! 私の代わりに【セカイ】を回ってくれない?」

暁

「はい？ セカイを廻るう？」

ルカ

「そのままの意味よ。あー、世界といつても他のセカイね。私が行きたいのだけど、今ここを離れるわけには行かないから代わりに行ってくれる人を探していたのよ」

暁

「でも俺普通の何も能力もないどこにでもいる大学生ですよ？」

ルカ

「それなら大丈夫。私が魔改……ゲフンゲフン！！ 能力与えるから！」

それを聞いて一瞬何をするのか怖かったが、

暁は、考えた。

アニメやゲームでしかない出来事が今日の前で現実に起きている。

それに他のセカイも気になる。

……これは、行かなければ後悔する！

ルカ

「どっつ？」

暁

「えーと、俺でよければ……………」

ルカ

「こんな事聞くのはおかしいけど、本当にいいの？」

暁

「はい、後で絶対後悔しそうなので」

ルカ

「そう…………… わかったわ、これであなたは、私の代行者ね」

暁

「はい、それで質問が…………… 色々セカイ廻るんですよ？」

そのセカイの知識とかは？」

ルカ

「大丈夫、能力付与時に一緒に頭に入れてあげるわ。』

暁

「それならいいです。知識なしで行くのは、自殺行為ですからね」

ルカ

「あら、結構考えているのねあなた。じゃ、能力を上げるわ。何か要望はある？」

暁

「そうですね。まずは、身体能力向上と能力限界突破、毒物などの耐性。

後ありとあらゆる知識と魔力と気両方無限状態で戦闘能力向上で」

ルカ

「ふむふむ、強さは、そのセカイで最強と同等。修業などしたらそれ以上に強くなるでいいのかしら？」

暁

『はい、それと出来れば、傷ついた時にその傷が回復したら一回り強くなるという感じで！

後、小説やアニメ特撮・ゲームとかの技や術を使えるようにして下さい！」

ルカ

「ええ、わかったわ」

暁

「要望は以上です。では、お願いします！」

ルカ

「今言われたやつと他のセカイの知識と後、何個か能力付き足しておくわね。

じゃ、能力を上げるわね」

そう言うと目を瞑り、何やら呟いている。

ルカ

「我^{わが}……力……かの者に……与えん……」

そういつと暁の全身が光に包まれた。

暁

「ッ……！！！」

光が収まるのを待って、ルカは、口を開いた。

ルカ

「ふう〜、能力を付加したわ。後、あなたの容姿もサービスで変えさせてもらったわ〜」

ルカがそう言って指を鳴らすと大きな姿見が暁の前に出現した。

暁

「容姿って……誰だ！ このイケメンは！？」

姿見に映っているのは、髪型は金色長髪で、赤い瞳をした顔立ちがF？のセイ スミたいな長身痩躯のイケメンが立っていた。

ルカ

「誰ってあなたじゃない？ どういい感じでしょ？」

暁

「これが俺だと……マジかよ！？」

ルカ

「じゃ、さっそくで悪いんだけど、行ってもらえるかしら」

暁

「行くのはいいですが、一体どのセカイに行くんですか？」

ルカ

「あなたにってもらうのは、【真剣で私に恋しなさい！】のセカイね」

暁

「まじこいか〜。わかりました」

ルカ

「では、ゲートを開くわね」

そういうと、暁の正面にゲートと呼ばれる魔法陣が出現した。

暁

「では、行ってきます〜」

ルカ

「はい、行ってらっしゃい〜」

そういつて、暁は、ゲートの中に消えていった……………

ルカ

「……………頑張つてね。」

暁には聞こえない声でルカは呟いた……………

t o b e c o n t i n u e d

Prologue 『神の代行者』（後書き）

作者「とうことで、始まりました。A・O・G（真剣で代行者に恋しなさい！）。とりあえず主人公カモン！！」

暁「呼んだか？駄作者」

作者「いきなり、駄作者かよ！！」

暁「本当に駄だろう。」

作者「それは、認める。」

暁「認めるのかよ！！」

作者「まあ、それはおいといて。」

暁「置いとくのかよ……。それはいいとして題名の『A・O・G』って 何の略？」

作者「AGENT OF GOD」

暁「まんまだな）——（；）」

作者「まんまです！！」

暁「開き直るなよ）——（；）」

作者「とりあえず、暁の詳細なデータは、また次の回で掲載するか

ら。」

暁「じゃ、なんで呼んだ？」

作者「ひとりじゃさみしいから。」

暁「子供か！」

作者「ということ、次からまじこいの主要メンバーが出てきます。では第1話でまたお会いしましょう。」

暁「じゃ〜な。」

閑話休題 オリジナルキャラ設定（前書き）

主人公やオリジナルキャラの設定などです。
オリキャラ増え次第随時追加していきます。

閑話休題 オリジナルキャラ設定

- 主人公 -

天錠 暁 てんじょう
あきり

性別：男

誕生日：10月2日

血液型：A型

身長：180・2cm

体重：68kg

性格：困ってる人を見過ごせないお人よしな性格 争いは好まない
が、大切な物を傷つける者には容赦はしない。

体格：長身瘦躯（程良く筋肉が付いている）

視力：左10・0 / 右10・0

趣味：料理 読書 鍛練 e t c . (多趣味)

特技：全ヶ 国語通訳 声帯模写

好きな物：鍋 努力している人 アニメ特撮 小説 ゲーム

嫌いな物：シソ 外道 上から目線で馬鹿にするやつ

尊敬する人：特になし。

見た目：F ?の フィロス 髪の色と瞳の色が異なり金髪赤い瞳

CVイメージ：近藤 隆

アニメ特撮・小説・ゲームが好きないわゆるオタクな大学生。

神の使い稲葉を助けた事により、神のルーと出会い、ルーの提案でルーの代わりにセカイを回ることになった。

性格は、困った人を見過ごせないお人よしな性格。しかし、大切な者達に危機が迫ると鬼神の如く敵を殲滅する。せんめつ

ちなみに家事はプロ級。

能力一覧

- ・ 身体能力向上
- ・ 能力限界突破
- ・ 怪我から回復すると一回り強くなる。
- ・ アニメ特撮・小説・ゲームなどの必殺技や魔法が使える
- ・ 氣と魔力は無限状態
- ・ イメージする事によって武器などが創りだせる。
- ・ 毒などの耐性
- ・ どんな人や動物から好かれる性格
- ・ ラブコメ体質
- ・ スーパー化
- ・ ありとあらゆる知識を持っている。
- ・ 戦闘能力向上
- ・ 操縦能力は、神掛かり級

-メインキャラクター-

光の神 ルカ〓ツヴァイト〓ルミナス

性別：女

誕生日：不明

血液型：不明

身長：156cm

体重：41kg

B：80 W：50 H：81

性格：サバサバしているが、実は結構甘えん坊。

体格：線の細いほっそりしている。

視力：測定不能

趣味：人間観察 ゲーム

好きな物：甘いもの全般

嫌いな物：辛いもの全般 外道

尊敬する人：父親

見た目：僕は友達が少ないの羽 川 子鳩 瞳は両方青。

CVイメージ：花澤 香菜

光の神。暁に神の代行者としての責務と能力を与えた人。
しゃべりは、結構サバサバしているが、結構甘えん坊で、寝るときには、クマのぬいぐるみが無いと寝れない
子供の一面を持っているが、普段は、結構まともなんで、ギャツ
プ萌えで部下からも愛されている。
父親と母親、それと一つ上の兄がいる。

冴場 涼香

性別：女

誕生日：5月7日

血液型：A型

身長：165cm

体重：53kg

B：95 W：53 H：89

性格：温厚穏やか 何事も臨機応変に対処する 茶目毛がある。

体格：抜群のプロポーションを持っている。

視力：左：2.0 / 右：2.0

趣味：読書 園芸

好きな物：天錠 暁 アールグレイ アップルパイ

嫌いな物：暁の敵になる者 外道

尊敬する人：天錠 暁

見た目：マケン姫っ！の二条 秋

CVイメージ：原田 ひとみ

天錠家に仕えるメイド長。年齢は、24歳。元は、凄腕のスイーパー。

しかし、あるきっかけで暁を生涯の主とし、メイドになる。

性格は、温厚で人柄も良く穏やか。しかし、一度怒ると暁でも棘み
上がるほどの

迫力がある。密かに暁が好きだが、年齢の差もあり、打ち明けられ
ずにいる。

- サブキャラクター -

神の使い 稲葉

性別：不明

誕生日：不明

血液型：不明

身長：100cm

体重：10kg

性格：しっかり者。結構のんき

体格：ウサギのぬいぐるみ大

視力：測定不能

趣味：ひなたぼっこ 料理

好きな物：にんじん

嫌いな物：とうがらし

尊敬する人：ルー（神）

見た目：西 屋のロゴのウサギ

CVイメージ：加藤 英美里

ルーの従者。見た目はウサギみたいな感じ。

性格は、結構しっかり者で頼まれた仕事はすぐ片付ける。

しかし結構のんきな為ひなたぼっこかボーとすることが大好き。暁の事は命の恩人として気にいっている。

ちなみにこの姿は、仮の姿らしい。

閑話休題 オリジナルキャラ設定（後書き）

作者「これから随時増えていきます。」

暁「一応、真面目に俺の設定作ってたんだな。」

作者「作らないと何かと心配ですよい」

ルー「私もあるのね。」

稲葉「私もありますよ！」

作者「二人とも呼んでないのに来たのか。」

ルー「あら、来ちゃ悪いの。（鋭い眼光）」

作者「いえ、悪くありません。」

暁「作者カツコ悪いな」

作者「だまれい、あの人怒らせるとシヤレにならん。」

暁「まあ神だしな。」

作者「こほん、では気を取り直して次は本当に第1話です。ではノ」

3人「またね」x3

第1話 『風間ファミリー誕生』(前書き)

ということで、風間ファミリーの面々が出てきますよ。

加筆修正致しました。

第1話 『風間ファミリー誕生』

なんで、こうなった？

それというのも俺・・・子供になってるやん！！

どういう事だぁ……………！！！！

ルカ

「（おゝい、アキラ〜）」

暁

「（頭にルカの声が……………これは……………念話か？）」

ルカ

「（正解よー！）」

暁

「（それは、それとしてなんで俺小学生なってるんだよ？）」

ルカ

「（今からその説明するから静かに聞いていてね。あなたには、この世界の主要人物に接触してもらおうわ！）」

暁

「（主要人物？ ああ！ 風間ファミリーの面々か？）」

ルカ

「（そうよ。そして、彼らと行動を共にしなさい。それ以外は、特

にないもないから自由に行動していいわよ？」

暁

「（自由に……ねえ）」

なら、俺の行動は決まっている。風間ファミリーの閉鎖的な感じと小雪達を救う事。

今の俺ならできるかもしれない。

なぜ、そうしようと思ったかというまじこいはプレイしてや
はりその事が気になったからだ。

元々、人を不幸にしようというのは正に合わないし、俺はハッピー
エンドが大好きなんだ。

それにも他にも救える人がいるはずだ。

暁

「（わかった。それ以外にやることは？）」

ルカ

「（あとは、その世界に存在しない人物や化け物いたら、話ができ
るなら話し合いを

話ができないならば殲滅をして頂戴）」

暁

「（殲滅って……… たしか、世界が不安定になるからだっ
け？）」

ルカ

「（ご明察。一応その事も知識として入れといてよかったわ）」

暁

「（とりあえず………了解だ。あ、それと………）」

ルカ

「（何？）」

暁

「（元いたセカイでは俺の存在はどうなったんだ？）」

ルカ

「（存在して無かった事になってるわ、でも、元いたセカイに戻れば元通りになるわ。）」

暁

「（そうか………よかった）」

ルカ

「（安心した？）」

暁

「（ああ、やはり自分が生まれたセカイだからな）」

ルカ

「（じゃ、一旦、念話斬るわね）」

暁

「（ああ、またな！）」

ルカ

「（ええ、またね）」

そう言って念話が切れた。

暁

「さてっと、がんばりますか」

そう言って、用意された家に帰った。

俺のこのセカイの役は、大企業の御曹司らしい。

しかも、この世界で3本の指に入る大企業だそうだ。

両親と兄貴は、今L Aに居る。

俺だけ、日本に残った。

世話係として、話の分かるメイド長の冴場 さえば 涼香さん りょうか含む

10人のメイドが俺に使えてくれている。

やはり両親と離れるのは悲しいが、彼女たちのおかげでそんなにさみしくはなかった。

暁

「涼香さん、ちょっと遊びに出てくるね」

涼香

「お一人ですか？ 最近物騒になってますし。護衛の者をお付けしましょうか？」

暁

「いや、大丈夫だよ。それは涼香さんも知ってるでしょ？」

涼香さんは、俺の力を知っている。なので、そこまで心配していない。

涼香

「フフ、そうですね。暁様の心配より相手のほうが心配ですよ」

「 ;) 」

暁

「ハハ、じゃ、いつてきます！」

涼香

「行ってらっしゃいませ」

そう言って見送りしてくれた。

屋敷を出ると

暁

「さて、風間ファミリーの面々と接触しますか？」

俺は目的地の空き地に向かった。

空き地に着くと案の定目標のダンボールハウスを発見した。

一応、ドアの隙間から中を覗いた。すると中には、バンダナの少年が何かしている。

暁

「（あれがキャップか）声をかけてみるか？」

そう思いながらドアを開けた。

翔一

「誰だ！」

暁

「ごめんよ〜 原っぱ来たらちょうどこのダンボールハウスが目に入ったから。」

これって一人で作ったの？」

翔一

「ああ、一人で作った！ それとこれは、【風雲風間城2号】だ！」

暁

「2号？ 1号は？」

翔一

「作った次の日に行ったら知らないおっさんが住んでたからあきらめた」

暁

「なるほどね〜 にしても所々やばい箇所があるな〜」

翔一

「なんだと！ 俺の作ったのにケチをつけるのか！」

翔一は、怒っていた。

暁

「怒ったなら、謝るよ。俺ならこの城をもつと頑丈にできるよ」

翔一

「本当か！どうやるんだ？」

暁

「ああ、それはね……」

それから俺たちは、風間城の補強案について大いに語り合った。

翔一

「おまえ、いろんな事知ってるな、友達になつてくれないか？
俺この町に来たばかりだから友達いないんだ」

暁

「俺でよければ、喜んで。俺の名前は、天錠 暁だ」

翔一

「アキラだな。俺の名前は風間 翔一ってんだ！」

暁

「ならシヨウだな！ よろしくな！」

翔一

「ああ！」

そういつて、握手を交わした。

それからいろんな話をした。シヨウは、親父さんと旅から旅の生活を送っていたそうだ。

で、シヨウの親父さんが、そろそろ腰を下ろすことになり、この町に引っ越してきたのだ。

翔一

「おまえ、天錠グループの総帥の子供なのか。すごいな！」

暁

「凄いのは、父さんのほうさ、俺が偉いわじゃない」

翔一

「じゃ、将来親父さんの会社継ぐのか？」

暁

「いや、うちの兄貴が会社継ぐから俺は継がないよ」

翔一

「そうなのか、じゃ、大人になったら旅にいかねえか？」

暁

「ははは！それもいいな。考えておくよ」

翔一

「楽しみだぜ！」

暁

「ああ！」

そう話していると外に誰かがいる気配を察知した。

暁

「（俺達と同じくらいの少年か。ということは大和か！）」

暁

「誰か外にいるみたいだ」

翔一

「誰だろ？ 出てみるか？」

暁

「ああ」

二人が外に出るとそこには、荷物を持ったニヒルな感じの少年が立っていた。

少年の名前は、直江 大和

話を聞くとどうやら家出をしてきたらしい。

大和

「俺は、母親がうるさいから家出したんだ。しかし、俺は冷静な子供だ。」

あまり遠くに行く俺の経歴に傷が付く」

暁

「お前、アホだろ？」

大和

「アホとはなんだ！」

あほと言われ、大和は怒っている。

暁

「アホはアホだ。冷静ならそんな事はしねえよ。

それに家出ならもっと遠くに行け。

母親に探してほしいのが丸わかりだ」

大和

「ぐっ……」

大和は、凶星を言われ黙った。

暁

「お前、人生は、死ぬまでの暇つぶしとか考えてねえよな？」

大和

「実際そうだろ？」

暁

「だから、お前はアホなのだ！ そんなこと考えてたら、人生かなり損するぞ」

大和

「何？」

暁

「いいか！……」

暁は、大和に人生とか色々説き伏せた。

すると大和の顔がニヒルな感じから打ちひしがれた感じに変化していき、OTL状態になっている。

大和

「た、たしかにお前の言うとおりだ。
俺はなんてアホみたいなことを言ってたんだ。
これじゃまるでかなり痛い人じゃないか」

暁

「まあ、それが分かっただけでもいいんじゃないか？
今ならまだ間に合うしな！」

大和

「お前、名前は？」

暁

「俺の名前は、天錠 暁」

翔一

「俺は、風間 翔一だ！」

大和

「シヨウイチかゝ 俺と友達になってくれないか？」

翔一

「ああ、お前面白いからいいぜ！」

大和

「それとアキラ・・・・・・・・俺をお前の弟子にしてくれ！」

暁

「弟子！？　なんでまた？」

大和

「お前は、俺の知らない知識をたくさん持っている。それにお前が師匠なら俺の夢に近付ける気がする。」

暁

「夢？　どんな夢だ？」

大和

「総理大臣になってこの日本を変えたいんだ！」

暁

「へえー、これまた大きな夢だな。半端な道のりじゃないぞ？」

大和

「覚悟してる。険しい道だと思うけど、どうしても俺はその夢をかなえたい！」

暁

「そうか・・・・・・・・わかった。俺の弟子にしてやるよ」

大和

「ほ、本当か！　ありがとございます。アキラいや師匠！」

なんか大和がうれしそうにそう言った。

俺は半ば呆れながら、

暁

「……はは。よろしくな！ 大和」

こうして、その日俺は、友達と弟子の両方を手に入れたのだった。

それから、引っ越してきたワン子事、岡本 一子（のちの川神 一子）と

島津 岳人と師岡 卓也が仲間に加わり、こうして

【風間ファミリー】が結成されたのだった。

t o b e c o n t i n u e d

第1話 『風間ファミリー誕生』（後書き）

作者「ということ、思い切り原作をプチブレイクしました。」

暁「なんか大和が弟子になったぞ？」

作者「元々、私は大和そんなに好きじゃありません。なので、あの少年時代の厨二病な性格を壊して、まともな道に戻すため、あえてこんな感じにしました。」

暁「そこまで考えてたのか、見直したぜ。」

作者「見直したって・・・お前私をいまままでどう思ってたの？」

暁「言つて欲しいか？」

作者「いえ、ごめんなさい、言わないでください。すみませんでした。」

暁「まあこの駄作者いじりはこれくらいにして、なんかワン子達の加入が思い切り

やっつけ感否めないんだけど——」

作者「んーそこまで盛り上がらないからな！。まあ次の話はあの人が出てくるから少しバトルあります。」

暁「あんまり戦いたくないけどな。」

作者「そう言わずに——」

暁「はあゝ、わかったからそんな顔するなよ。」

作者「わかってくれたなそれでいい!」

暁「なんか釈然としないな。」

作者「では、次回第2話『百代との出会い』でお会いしましょう。」

暁「はあゝ、本当、めんどくさいわ。」

第2話 『百代との出会い』 (前書き)

という事で、まじこいメインヒロインの一人川神 百代登場です！

第2話 『百代との出会い』

風間ファミリー結成から数日がたったある日の事

同じ学校の上級生のグループが、俺達の秘密基地を奪おうと喧嘩を売ってきた。

なんとか追い払ったものの秘密基地は壊されてしまった。

翔一

『ちくしょう！あいつら秘密基地壊しやがって！』
悔しそうに怒っている。

岳人

『まったくだぜ！にしても人数が多すぎる。』

大和

『仕方がないよ、師匠がいたらあんなやつら倒せたけど、今、松笠に行ってるし。』

卓也

『たしかにアキラいるとすぐ決着付きそうだけど――（；）』

一子

『ねえ、キャップこれからどうするの？』

翔一

『大和、なんか策ねえか？』

大和

『んー、そうだな。助っ人頼むか。』

一子

『助っ人？』

岳人

『なんか当てがあるのか？』

大和

『ああ、川神院って知ってるか？』

卓也

『武術の総本山でしょ？それがどうしたの？』

大和

『その総代の孫が俺たちの学校の上級生なんだ。名前はたしか川神 百代』

翔一

『たしかにそいつが助っ人してくれたら、鬼に金棒だな！』

大和

『助っ人の件は、俺が行ってくるよ。』

岳人

『おう！任せませ！大和。』

とりあえず、川神 百代をする事に決定した。

そんなやりとりを遠くからじいーと見つめる少女が一人、

京

『・・・いいな、楽しそう・・・』

少女の名前は、椎名 京

後に風間ファミリーの一員になるのだが、それはまた別のお話・・・

.....

所変わってここは、川神院

武術の総本山にして、武の頂点。

多くの武術家が、今日も武の境地を目指して鍛練を続けている。

百代

『さてと、今日も走り込み行くか？』

そうやる気がない口調で山門を出ると一人の少年が門の前に立っていた。

大和

『すみません、ここに川神 百代って人いますか？』

百代

『川神 百代は、私だが？』

大和

『いきなりで悪いのですが、力を貸していただけませんか？』
そう言っつて、大和は頭を下げた。

百代

『ここではなんだ、近くの川原で話を聞こうか？』

大和

『はい。』

そう言つて、二人は、多馬川の川原に移動した。川原に到着すると大和は、百代に助っ人の依頼をした。

百代

『それは、ゆるせないな、私は卑怯なやつや不誠実なやつが大嫌いだ。』

でも、何か見返りがないと私手を貸さないぞ?』

大和

『では、報酬としてこれを。』

そう言つて差し出したのは、百代が集めている野球カードのレアカードだった。

百代は、上機嫌でこれを受け取り、

百代

『後、こつちからお前に条件がある。おまえ私の舎弟になれ!』

大和

『舎弟ですか（ ー ; ）、あの拒否権は・・・?』

百代

『拒否した場合は、助っ人の件は無しだ。』

大和

『わ、わかりました、あなたの舎弟になります。』

その答えを聞くと百代は嬉しそうに

百代

『そうか！今日からお前は私の義兄弟だ！よろしくな大和。』

大和

『よろしくお願ひします！姉さん。』

そういつて、握手を交わした。

百代

『あ、そうそうもし契約を破ったらお前を髑り殺すからな。何度も言うが

私は不誠実なやつは嫌いだ！』

鋭い眼光で大和を見る。

大和

『は、はい……。』

このとき、大和は心底後悔したというOTL
とりあえず合掌 チーン

- - - - -
- - - - -
- - - - -

数日後、また例の上級生のグループが風間ファミリーに難癖付けてきたが、

百代によって一瞬にして上級生たちは、倒されていった。

上級生 A

『う、痛いよ』

上級生 B

『う、腕が！！』

上級生C

『こ、こいつ強え!!』

上級生D

『止める、止めるよ。』

百代

『命乞いは見苦しいぞ。』

百代は、心底楽しそうに喜んでいる。

上級生リーダー

『俺は本当の悪だ。子猫や子犬でも平気で殺せる。お前も殺してやるぜ!』

しかし、両足が震えているので、ただのハツタリだとすぐわかる。

百代

『悪ね、へえー、素敵だなあ先輩。デートしてくれ!』

大和

『あ、キレた。』

翔一

『キレたなあー』

一子

『百代お姉ちゃん、怒ってる!』

岳人

『俺、知らねっと。』

卓也

『あーなったらもう止められないね。』

風間ファミリーの面々は、完全に傍観者になっていた。

百代

『先輩、あそこの3階の屋根まで付き合ってくれ。』
そういつて、近くの建物を指さし、上級生リーダーの足を持って、その建物の屋根に一瞬にして飛び上がった。

風間ファミリー

「まさか・・・」x5

百代は、足を持つてる相手を地面にそのまま足で着地できるように空気投げで投げ飛ばしそのまま落した。
しかし、予想もできない事が起きた。

？

『おいおい、ここまでやる必要はないだろう。』
そう言った少年は、落下している上級生リーダーを瞬時に助けた。

百代 side

大和の約束の通り、私は、風間ファミリーの助っ人になった。
ファミリーの面々は、結構いいやつが多く私もこいつらが好きになった。

そんなある日、同じ学校のあほな上級生たちが私たちに難癖付けてきた。

それで、上級生の一人が、メンバーの一子を殴った。

その瞬間、私は怒った。私の仲間は今何をした？

これは許せることではない。とりあえず、向こうからやってきたんだ。

こちらのせいじゃない。

私の仲間に手を上げたんだ。お前達覚悟はできているんだろうな。

私は、そいつらの腕の骨を外していった。

上級生リーダー

『俺は本当の悪だ。子猫や子犬でも平気で殺せる。お前も同じ様に殺してやるぜ！』

こいつは馬鹿か？そんなハツタリ私に効くか！とりあえず、こいつはあの建物屋根から落そう。

そうしよう。ただそのまま落してもおもしろくないので、両足で着地できるように落すか。

百代

『先輩、あそこの3階の屋根まで付き合ってくれ。』

そういって、近くの建物を指さし、上級生リーダーの足を持って、その建物の屋根に一瞬にして

飛び上がった。そして、躊躇なくそのバ力を落した。しかし、予期せぬ事が起こった。

？

『おいおい、ここまでやる必要はないだろう。』

なんだこいつは？私が助けたのを見えなかっただど？

百代は、ただただ驚いていたが、やがて獰猛な笑みを浮かべた。

おもしろい！こいつはおもしろいぞ！たぶん実力は私より遙かに上だ。

こんなやつが近くにいたとは！？しかも歳は、私と同じくらいか。本当に面白い！

百代の興味は、その助けた少年に行き、いままでやっつけていた上級生の事など

すでに眼中になかった。

百代 side out

一子

『あれって・・・アキラ?』

大和

『ああ、間違いない、師匠だ。』

翔一

『おお、本当だ。』

岳人

『でも助かったぜ。』

卓也

『本当だね、僕たちじゃ止められなかったし。メンバーは安どの表情を浮かべそう言った。』

百代

『そこのおまえ、何者だ?』

暁

『俺は、天錠 暁 風間ファミリーのメンバーだ!』

百代

『そうか、おまえがあっ・・・、私は、川神 百代だ。』
そうか、こいつが川神 百代か。

暁

『とりあえず、その前に・・・』
そう言っつて、上級生グループを鋭い眼光でにらむ。

上級生グループ

『ひい!!!!!!!!!!』

暁

『先輩方、この前忠告したのにまたつつかかってきたのか？
俺言つたよな？次つつかかってきたら殺すと……。』

暁は、軽く殺気を放ち言った。

上級生グループ

『す、すみませんでしたm) | | m』 x 15

上級生たちは、おもいきり暁に土下座した。

暁

『もう二度とつつかかるな、つつかかってきたら……。』

上級生グループ

『はい、もうつつかかりません!!!』 x 15

暁

『さて……。』

暁は、腕の関節が外れている上級生たちを関節をはめ直して行った。

ゴキツゴキツ x 14

上級生達の断末魔がこだました。

〈数分後〉

上級生たちは、一目散に逃げ出した。

暁

『ふう、やっと終わったな。』

そう言つて、暁が一息ついていると

百代

『おい、おまえ！私と勝負しろ!』

暁

『いいよ。ここじゃなんだし、お前のところでいいか？』

百代

『ああ、いいとも！』

大和

『師匠あっさり勝負受けたね。』

翔一

『そりゃ負けないからなあいつ。』

一子

『アキラ強いものね！』

岳人

『ああ、あいつが負けたとこみたことがねえ。』

卓也

『そうだね。』

そう話ながら、風間ファミリーの面々は川神院に移動した。

.....

百代

『じじイ！いるか？』

そう呼ぶとりっぱな髭を蓄えた老人が奥の間からでてきた。

鉄心

『なんじゃい、百代騒々しい。』

百代

『こいつと手合わせしたいんだ。審判してくれ。』

鉄心

『ん？どの子じゃ？』

暁

『俺です、はじめまして天錠 暁と申します。川神 鉄心殿。』
そう言って、頭を下げた。

鉄心

『お主、なにか武術をしておるのか？』

暁

『はい、我流ですが・・・』

鉄心

『ふむ・・・』

鉄心は、暁をじいーと観察するように見ている。

実力は百代より上か。しかも相当な武を持っておる。

これは、百代にいい相手ができたわい。

鉄心

『よかるう、修練場で手合わせを行おう。』

百代

『本当か！いくぞアキラ』

暁

『ああ。』

そういつて、鉄心を加え修練場に移動した。

修練場では、師範代の釈迦堂 刑部とルー・イ が、門下生と修練

していた。

鉄心

『釈迦堂とルーこっちにきてくれ。』

二人は、鉄心の元にやってきた。

釈迦堂

『総代何か用ですかい？』

鉄心

『今から百代とそっちにおる少年の手合わせするんのでう、』

門下生達の修練を一時やめてもらえんか？』

ルー（師）

『ハイ、ワカリました。一時修練中断ネ〜。』

そう言うと門下生達は、端のほうに移動した。

鉄心

『すまんのう、百代、アキラ君と言ったか中央へ。』

そう言うと二人は、中央で相対する。

鉄心

『では、これより手合わせをはじめ。東方！川神 百代！』

百代

『ああ！』

鉄心

『西方！天錠 暁！』

暁
『はい!』

鉄心

『それでは、はじめい!』

百代

『はあああああ~~~~!』

先に動いたのは、百代だった百代の鋭い複数の突きが、暁を仕留めようと狙ってくる。

しかし、暁は、最小限の動きでその鋭い複数の突きをなんなく躲す。

百代

『チイ!~!~!』

百代は、舌打ちすると攻撃を蹴りに変えてきた。

百代

『ウラァウラァウラァウラァ!』

連続の蹴りが暁を襲う。しかしまたしてもなんなく躲し、百代の足を掴みそのまま

暁

『ふん!~!』

ドガあ!~!~!~!

地面に叩きつけた!!

百代

『グハあ!~!~!』

暁

『まだ終わりじゃないだろ？』

百代は、一瞬にして体勢を整え構える。

百代

『ああ！！』

暁

『ハハ！そうこなくつちやな！』

暁は、そう言うとうれしそうに笑いながら言った。

二人の戦いはまだ始まったばかり……。

t o b e c o n t i n u e d

第2話 『百代との出会い』 (後書き)

作者「ノリノリだね、暁。前回めんどくさいって言ってた割には・・・」

暁「やってみたら意外に楽しかった。」

作者「まあ、いいけどね。」

暁「そういえば、チヨ口つと京でできたね。」

作者「ちよつと出したかったしね。でも本格的に出てくるのは、3話くらい後です。」

暁「そうなんだ。」

作者「それまで連続でバトルが続きます。」

暁「もしかして・・・。」

作者「たぶん考えている通りかと・・・」

暁「はあー、俺にはのんびりする時間はないのか・・・。」

作者「あ、そうそうオリキャラ情報更新します。」

暁「ああ、涼香さんか。」

作者「そぞ。では次回第3話 『決着、そして・・・』でお会いし

ましよう!」

暁「ではまたな!」

第3話 『決着、そして・・・』 (前書き)

暁VS百代の続きからどうぞ

第3話 『決着、そして・・・』

鉄心 side

全く驚いたわい・・・。まさかここまで一方的とは・・・。

鉄心の額から汗が流れる。

しかも、あの少年本気を出しておらん。

この子ならば百代を正しい武の道に導けるかもしれない

鉄心は、心の底からそう思った。

鉄心

『ほおほ、それにしても・・・、儂も久々に戦いたくなったのう。』
そう言つて、鉄心は微笑んだ。

鉄心 side out

百代

『ウオリヤー——————！！！！川神流・致死蚩！！！！』

バシユン！！ バシユン！！

百代の掌から無数の気弾が飛んでいく。それはさながら本当に蚩の様だった。

暁

『はあ——————！！！！』

しかし、暁は、回し蹴りで全ての気弾を打ち落とした。

百代

『そいつは、オトリだ！！喰らえ！川神流・無双正拳突き！！！！』

ドゴーン！！！！！！

暁の身体に鋭い正拳突きが、突きささる。

百代

『どうだ！！何っ！？』

たしかに無双正拳突きが暁にヒットした。しかし、その突きは、暁の掌でガードされている。

暁

『なるほどな、その歳でこの威力か。うんじゃ俺も少し本気を出すよ。』

そう言った瞬間、百代の背筋にゾクっとした。まるで首筋に死神の鎌が当てられてるような感覚。

やられる！と思った百代は、一旦後方に飛び退き、また構えた。

暁

『うんじゃ、いくぞ！』

その瞬間、暁の髪と瞳が変化した。髪の色は金色。瞳は赤に。

百代

『なっ！？？』

百代は驚いている。

暁は、百代に駆け寄り

暁

『大丈夫か？』

百代

『ああ、大丈夫だ。もう少ししたら動ける。にしてもおまえ、強いな。』

そういつて微笑んだ。

鉄心

『百代、どうだったかの？』

百代

『世界は広いな、じじい。ますます世界に旅に出たくなったぞ！』
そう元気に答えた。

百代がこんなにすっきりした顔するとはのう。

本当にありがとう、暁君。

お主のおかげで百代は、また一回り心が成長した。

鉄心は、心の底から暁に感謝した。

釈迦堂 side

まさか百代に勝つちまうとはよ。面白い餓鬼だな。

俺もいつちよ戦いたくなつたぜ！

釈迦堂は、獰猛な笑みを浮かべた。

釈迦堂 side out

ルー師範代 side

百代、良かったネ。

本当の強敵ついでに出会えテ。

にしてもアノ武術ハ一体？

ルー師範代 side out

暁

『さて、鉄心殿お願いがあります。そこにいる師範代二人と勝負させてもらえませんか？』

鉄心達川神院全員が驚いた！？

鉄心

『なぜじゃ？』

暁

『今は言えませんがこの勝負が終わったら理由をお教えます。』
暁は、真剣な表情でそう答えた。

鉄心

『何か理由があるんじゃないかな？良かろう、釈迦堂とルー二人ともこの子と仕合なさい。』

ルー（師）

『総代お言葉ですが、その子は、まだ子供ですヨ？もしものときだつてあります！』

釈迦堂

『ルー、じゃ、おまえはそこで見てな！それにその餓鬼は、普通の

子供じゃない。

俺たちと同じ武術家だ！
『そう言っつて、ルーを睨んだ。』

ルー（師）

『しかし・・・』

ルーは、迷っている。

暁

『お心遣い感謝しますが、遠慮なんてしないでください。ここから先は、武と武の真剣勝負です。』
それにそれは俺に対する侮辱ですよ。』

ルー（師）

『！』

ルーは悟った。この子は覚悟がきている。ならばそれに対して、子供だからといった理由で勝負をしない事は、失礼にあたる。

ルー（師）

『分かったヨ。ならばお相手しよう！』

ルーの細い目は、見開かれ本気という感じすぐ伝わった。

鉄心

『では、どちらからいくかの？』

釈迦堂

『俺から行くぜ！』

そう言っつて、釈迦堂が修練場の端から一気に中央へやってきた。ちなみに百代は、風間ファミリー側に横に置いてきた。

暁
『では、よろしく願います。』

釈迦堂
『ああ、よろしくな!』

そう言うてお互い礼をした。

鉄心
『それでは、仕合を始める! 東方! 釈迦堂 刑部!』

釈迦堂
『オウ!』

鉄心
『西方! 天錠 暁!』

暁
『はい!』

鉄心
『それでは、はじめい!』

そして釈迦堂と暁の死合が、始まった!!

t o b e c o n t i n u e d

第3話 『決着、そして・・・』 (後書き)

作者「圧勝だったね。」

暁「まあな、百代は、まだそんなに強くないし。」

作者「まあね、瞬間回復能力あったらやばかったと思ったけど・・・」

暁「まあ骨は折れるけど負けないよ俺？」

作者「まあ、それは置いといて。」

暁「置いとくなよ(´・`・´)」

作者「次は、釈迦堂さんの死合だね。」

暁「一瞬誤字だと思ったたらたしかにそうなるだろうな。」

作者「それはそうと暁が使った技の説明をば。」

技名

機神拳無双奥義・真霸隴撃烈破

無数の龍の形をした気弾を連続で撃ち込み相手を上空へと押しやり、無防備な相手に気を纏った脚で飛び蹴りをする機神拳の機神拳無双奥義。

登場作品：無限のフロンティアEXCEED

主人公アレディ・ナーシュの必殺技。

作者「いやー、やっぱりこれでしょう。」

暁「たしかにこういう系統には、合いそうな技だな。」

作者「という事で、次回、第4話 『釈迦堂 刑部』 でお会いしましょうー!」

暁『うんじゃな。』

第4話 『釈迦堂 刑部』(前書き)

という事で、川神院での戦いはまだまだ続きます！

第4話 『釈迦堂 刑部』

その少年は、孤独だった。

少年は、天才であるがゆえ、周りから嫉み・疎まれた。

少年は、どんどん孤独になり、性格も歪んで行った。

歳月が過ぎ、少年から青年になることには、男は、暴力の日々を過ごしていた。

そんなある日、青年は、川神 鉄心に出会った。それが運命の出会いだった。

青年は、川神院の門弟になり、凄まじき速さで川神流を習得し、師範代にまでなった。

しかし、そこでも青年は、孤独だった。

力を追い求めるがゆえ、彼は、戦い続ける修羅の道のスタート地点に立っていたのだ。

その青年の名は・・・ 【釈迦堂 刑部】

鉄心

『それでは、仕合を始める！ 東方！ 釈迦堂 刑部！！』

釈迦堂

『オウ！』

鉄心

『西方！ 天錠 暁！』

暁

『はい!』

鉄心

『それでは、はじめい!』

鉄心から開始の合図があつたが、二人は、構えたまま動かなかった。

釈迦堂

『そつちがこないなら!こつちからいくぜ!』

そういつて、釈迦堂は、大地を蹴つて、一瞬にして暁の間合いを詰めた。

暁

『(速い!)』

釈迦堂

『オラ!!オラ!!オラ!!』

高速の突きが、暁を襲う。

暁

『ちイ!!』

暁は、その突きに臆することなく迎撃していく。

釈迦堂

『ハハハ!!!なかなかやるじゃねーか!ならこれでどうだ。川神

流・星殺し!!』

拳圧から発せられるソニックブームが暁に直撃し、後方に吹っ飛ば

される！

暁

『ぐっ！！！！』

すぐ様、体制を整えるが、もう目の前に釈迦堂が距離を詰めていた。

釈迦堂

『遅せえ！！川神流・大蠍撃ち！！！！』

暁の腹に鋭い突きが、突きささる。

暁

『ぐはあ！！！！』

暁は、地面に倒れた。

釈迦堂

『もう終わりか？偉そうな事言ってた癖にこの程度か。もう少し
楽しめると思ったんだがな。』

釈迦堂は、地面に倒れている暁にそう落胆したような感じで言った。

風間ファミリーside

百代

『相変わらず、釈迦堂さん、容赦ないな（。|。；）』

一子

『アキラ！！！！』

大和

『ワン子落ち付けて、師匠が負けるわけないだろ？』

翔一

『ああ、そうだな!』

岳人

『で、でもよ〜。動かねえーぞ(@|@・;)』

卓也

『大丈夫かな〜アキラ(| ;)』

百代

『あれだけ決まればまず動けないだろう。』

翔一・大和・一子・岳人・卓也

『そんな〜』x5

それを聞いて5人は、真剣で心配になったが、

暁

『痛つてえ〜。』

そう言つて、すぐ立ちあがり構えた。

釈迦堂

『なっ!〜!』

暁

『やっぱり、川神院だけあつて強いや〜。』

釈迦堂

『おいおい、まじかよ、そんなにダメージないだど!?!』

全員

『(@ @ ;) ! ! !』

全員口をあんぐり開けていた。

暁

『さて、本気出そうかな。』

釈迦堂

『本気だと!!』

風間ファミリースide out

暁

『さて、本気出そうかな。』

今なんて言った？さっきまでが本気じゃなかっただと？

ふざけるな！ここまでこけにされたのは、はじめでだ。

こいつは、殺す！絶対殺す！

釈迦堂から禍々しい氣が全身から放たれる!!

釈迦堂

『おい！餓鬼!!調子に乗らせて置けばいい氣になりやがって!!』

暁

『釈迦堂さん、あんた負けた事無いでしょ？あんたは一度負けたほうがいいよ!!』

その瞬間、暁の氣が一気に膨れ上がった。

百代

『なっ！！』

鉄心

『なんじゃと！！』

ルー

『ナント！！』

釈迦堂

『なっ……。』

川神院全員が驚いている。

暁の氣は、釈迦堂の禍々しい氣より遙かに大きかった。

おいおい、シャレになんねえぞ！！

この力は、まるで総代級じゃねーか……。

あの氣に比べれば俺の氣なんてカスに等しいじゃねーか……。

あの餓鬼トンデモねえ……。

しかし、この氣はなんだ？

人が出せる氣じゃねーぞ。

どっちかと言えば神とかそいった類の神聖さのある氣だ……。

今更ながら、釈迦堂は後悔した。

自分は、天才だと思っていたが、

この少年に比べれば自分は凡人。

俺は、なんて勘違いをしていたのだろう。

正に自分は、井の中の蛙だったのだ。

釈迦堂が呆然としてしていると目の前の暁の姿が、一瞬にして消えた。

釈迦堂

『なっ！！どこいっ！！！！！！！！！！』

もう目の前に暁がいた。

暁

『荒れ狂う殺劇の宴！殺劇舞荒拳！！！！』

釈迦堂に蹴りや拳などのまるで踊りを踊ってるかの如く連続して撃ち込む！！

暁

『ウララララララララララあ！！！！！！！！！！』

ゴスツ ドゴン バキ ボキ ドキ！！

釈迦堂

『へぶ・・・ごぶ・・・あふ・・・！！！！』

釈迦堂は、まるでサンドバックの如く殴られ蹴られまくった。

暁

『これで最後だ！！！！』

そういつて、釈迦堂の顎目掛けてアッパーカットが炸裂した。

釈迦堂

『ぐはあ！！！！』

釈迦堂は、天空に上げられそのまま受身を取れずに地面に叩きつけられた。

鉄心

『釈迦堂！！！！』

釈迦堂は、地面に横たわったまま動かなかった。

釈迦堂

『…………』

どうやら気を失っているようだ。

鉄心

『ほっ。』

鉄心は安堵の息を吐いた。

鉄心

『それまで、勝者、天錠 暁！！』

川神院門弟たちは、驚きを隠せなかった。

百代

『アキラが勝った……。まじか……。(@;)]』

百代は驚いていた。たしかに私より遥かに強いとは知っていたが、まさか釈迦堂さんを倒すとは……。あいつの本当の実力は一体……。

ただただ呆然とするのだった。

それを横目に風間ファミリーのメンバーは、暁の勝利を喜んだ！

b e c o n t i n u e d

t o

第4話 『釈迦堂 刑部』(後書き)

作者「ということ、いかがでしたでしょうか？」

百代「釈迦堂さんに勝っちゃったよ(´・`・´)」

作者「たしかにアイツどこまで強いんだろうね(´・`・´)」

百代「いや、おまえが驚いちゃダメだろ!！」

作者「てへっ」

百代「きしよいわ!川神流・雪だるま」

カチーン

作者「っ、つべた……い」

パリーン

作者「冷たいわ!！」

百代「何っ!あれを破っただと……」

作者「作者なめんな!」

暁「一体何してるんだか……(´・`・´)」

作者「それはそれとして、今回使った技の説明タイム!」

技名

殺劇舞荒拳

拳や蹴りなどで敵を攻撃する乱舞技

登場作品：テイルズシリーズ

作者「いや、使ってみたかった技です。」

暁「たしかに違和感ないよな、この技。」

百代「私が覚えてたら使えそうだし。」

作者「うんうん。さてとそろそろ。」

次回、第5話 『伝えたかった事』でまたお会いしましょう。

┌

暁・百代「では、またなあ〜」×2

第5話 『伝えたかった事』 (前書き)

次は、ルー師範代戦と思いきや・・・

第5話 『伝えたかった事』

暁 VS 釈迦堂は、暁の圧倒的な戦闘力の前に釈迦堂はなすすべなく倒された。

それから30分後

暁

『これでよしと。』

暁は、釈迦堂と百代に治癒功ちゆこうを使い、傷を治した。

百代

『これは、内氣功か？一瞬で傷が癒えたぞ！』

百代は興奮しながらそう言った。

暁

『ああ、その通りだ。俺は、治癒巧と呼んでいる。』

鉄心

『ほっほっほ、その歳で、氣を自在に扱えるとは、本当に未恐ろしいのう。』

暁

『いえいえ、まだまだです。』

そういつて、暁は謙遜した。

鉄心

『ほっほっほ、謙遜せんでいいわい。』

そうやって、鉄心達と話していると釈迦堂が目を覚ました。

釈迦堂

『つ……俺は……。そうか、敗けたのか……。』

ルー（師）

『ああ。』

釈迦堂

『俺は、今まで自分を天才だと思っていたが、間違いだったんだな。』

ルー

『釈迦堂……。』

鉄心

『暁君、君はなぜ、百代や釈迦堂と仕合しようと思ったのかね？』

暁

『それは、このままあの状態でいけば二人は、修羅の道を歩みそうだったからです。』

釈迦堂・百代

『！』×2

二人は、ドキッとした。凶星だった。

鉄心

『気付いておったか……。』

どうやら鉄心も薄々そう思ってたらしい。

暁は、コクリと頷いた。

暁

『二人はどうやら同世代もしくは年下の人に負けた事はなかったの
でしょう。』

『そういう人は、人に敗けた時、かなり脆い。』

釈迦堂・百代

『……』 × 2

暁

『人間一回は、挫折したほうがいいと思います。』

鉄心

『それはなぜかね?』

暁

『慢心があるからです。』

釈迦堂・百代

『……』 × 2

暁

『自分は強い、誰にも負けないそういう慢心した状態だと視野が狭
くなる。』

『極端な話、自分の周りしか見れなくなる。』

釈迦堂・百代

『!』

『どうやら思い当たる節があるようだ。』

暁

『一度敗け、挫折を知った時、狭かった視野も広くなる。視野が広くなれば、いろんな事にも興味が出て、

自分の世界が広がる。そういうのがあってはじめて人は本当の意味で強くなる。』

暁は二人を見据えた。

釈迦堂

『はあく、参ったね、まさかかなり年下に教えられるとはねえ。』
そういつて、頭を掻きながら、なんともすっきりした顔をしていた。

百代

『たしかに私の視野は狭かったかもしれない。こんな近くに私よりも強い奴がいたんだからな！』
百代は嬉しそうにそう答えた。

二人とも肩の力が抜け、憑き物が取れた様な清々しい顔をしている。釈迦堂に至っては、若干濁っていた目も濁りが無くなって禍々しい雰囲気は無くなっていた。

暁

『後、もう一つは、鉄心殿。たしかに川神流は、伝統とか色々あるかもしれないが、

それに合わないからダメとかおかしいと思いますよ？それも視野が狭くなってる証拠ですよ。』

鉄心

『た、たしかにのう（……）儂も視野が狭くなっていたようじ

やのう。』

暁

『わかってくれればそれでいいですよ。もしわかっていただけなかった場合は・・・』

潰してましたから・・・川神流。』

そう言った瞬間、明らかに先ほどの数倍以上の氣を暁は出し、背後に般若の顔が見える。

ゾクッ！

鉄心は、動けなかった。額から冷たい汗が流れる。

この少年は、儂と同様・・・いや、儂より強い！！

鉄心は2度とそんな事考えないようにしようと思つた。

他の全員もガクガクと震えていた。

怖ええ・・・！！！！！！

暁は、殺氣を消し、

暁

『とりあえず、ルーさんとの仕合しましょうか！』

そういつて、微笑んだ。

鉄心

『そ、そうじゃのう。ルーこっちに來なさい。』

ルー

『イエ、私は遠慮させていただきます。今ノ私では、到底勝てませんしネ（・・・）』

困った顔でそう言った。

鉄心

『そう言っとなるが、(暁君) どうする?』

暁

『そうですか。ルーさんとは戦ってみた方ので残念です。』

鉄心

『まあ、仕方ないのう。ということ、仕合は終わりじゃ、騒がしてすまなかつたのう、皆の衆。』

そう鉄心が言ったその時、

????

『ナンダヨ、セツカクイイカンジニ魂ガケガレタノニヨウ』

するとどこからか誰かの声がした。

釈迦堂

『ガあ!!--』

釈迦堂の口から黒い霧のようなものが出てきた。

その黒い霧が集まり、人型へと姿を変え、そこから、

顔はイナゴで腕が4本2対の人型のバケモノが姿を現した。

一子

『キヤーーー!!!!!!バケモノ!!!』

岳人

『おいおい、なんだありゃ!!!--』

卓也

『あ、あいつは……!!!!』

翔一

『いい!!!!』

大和

『俺は夢でも見てるのか?』

風間ファミリーの面々は、混乱している。

鉄心

『なんじゃ、あれは……。』

百代

『なんなんだ、あれは。』

釈迦堂

『お、俺から……出てきた……だと!?!』

ルー

『アイヤー、妖怪ネ!!』

暁

『あれは……悪魔^{デーモン}!!』

t o b e c o n t i n u e d

第5話 『伝えたかった事』（後書き）

作者「ついに【敵】が現れた!！」

暁「これは意表を突かれたぜ。」

作者「今回は、暁君の武器での戦闘が見れますよ。」

暁「ああ!！」

作者「それは次回のお楽しみという事で恒例の技紹介のコーナー。」

技名

治癒巧

気功で相手の体力を回復させる技

登場作品：テイルズシリーズ

作者「次回、第6話 『悪魔』でまたお会いしましょう!！」

暁「では、次の話で!！」

第6話 『悪魔』（前書き）

ちなみに登場した悪魔の名前は、【ヴァースト】と言います。
ということとで初の人外との戦いです。

第6話 『悪魔』

暁

『あれは・・・悪魔デーモン!!』

百代

『あれを知ってるのか!?!』

暁

『ああ、あいつらは、この世界の物じゃない。悪魔界というセカイに棲む異形の物だ。』

見たところ、下級ランクと言った所か。』

百代

『あれでか!あれはどう見てもじじいクラスだぞ!』

百代の言うとおりである。悪魔が発してる禍々しい邪気は、軽く川神 鉄心クラスだった。

暁

『ああ。』

ヴァースト

『説明八終ワツタカ?小僧。』

複眼で暁を睨みつけている。

『ヨクモ邪魔シテクレタナ、アトモウ少シデ、

魂ヲ収穫デキタノニヨク。』

釈迦堂

『魂を収穫だと?ふざけるな!』

暁 『なるほど、最初からお前の仕業だったわけか？』

ヴァースト

『勘違いスルナ小僧。元々ソイツハ魂ガ穢レカッテイタカラナ。チヨットオ手伝イシタダケサ〜。ケケケWWW』

暁

『お前たちにとって、穢れた魂は何より美味しいらしいな。』

ヴァースト

『アア、ヨダレガ出ル程ニナ〜。』

暁

『なるほどな、さて、俺はある人物から依頼されててな。お前みたいなのやつを狩る仕事をしている。』

ヴァースト

『何？オマエハモシカシテ、悪魔狩りか？』

暁

『いや、違う。そうだなしいて言えば【神ゴッドのエージェント】の代行者【って、とこかな。』

ヴァースト

『！、キサマガカ！』

暁

『知っているのか？』

ヴァースト

『俺ヲコノセカイニ召喚シタ男ガ、ソウイツテイタ。』

男？そいつが黒幕か。

暁

『召喚した男って言うのは？』

ヴァースト

『コレ以上シャベルト俺ガ消サレルノデネエ。』

暁

『ふむ、そうか。とりあえず、お前を滅する！』
その瞬間、圧倒的な気が放たれた。

ヴァースト

『残念ダガ、ヒトマズ逃ゲサセテモラウゼ。』
そういつて、逃げようとするヴェーストを

暁

『ゴルゴネイオン！』

光の複数の輪がヴァーストの動きを封じるように
まるごと束縛した。

ヴァースト

『ナッ！動ケネエ〜。』

ヴァーストは、ジタバタしている。

暁

『続けて、五連結界（小）』
暁とヴェーストを包むかの如く半径500m一帯に強力な結界を張った。

百代

『おい、アキラ何をしてる！』

暁

『こいつは、俺が滅する。今いるメンバーでは俺しかこいつを倒せない。』

百代

『なんだと！！』

暁

『事実だ。お前たちでは、悪魔に傷をつける事が出来ない。できるとすれば……。』

そういつて、左手を前につき出し、

『create！！我、求めるは、魔を斬りし剣、現れ出でよ！魔戒剣！』

そういうと一振りの剣が突然現れた。

ヴェースト

『ソ、ソレハ魔戒騎士ノ！』

暁

『知ってるらしいな。では往くぞ！』

ヴェーストを拘束した光の輪が解かれ、自由になる。

暁は、手でクイクイと挑発している。

ヴァースト

『オノレ、返り撃ちニシテヤル!!』
そういつて襲いかかってきた。

暁は、剣を抜き、頭上に円を描いた。その瞬間円の内側から光が漏れ、

一瞬にして、暁は、黄金の獣の仮面を付けた騎士姿になった。
そして、剣も先ほどの細い剣から幅広の装飾が美しい剣【牙狼剣】へと変化した。

ヴァースト

『黄金騎士だと!?!』

ヴァーストは驚いていた。

暁は、剣を横にして、魔導ライターで緑色の炎を付け、剣に炎を纏わせた。

ヴァースト

『クツソー!コケニシヤガツテ!死ネー!!』

ヴァーストは、全ての手の爪を伸ばし、襲いかかってくる。

暁は、剣を構え、

暁

『空破斬!!』
炎を纏った剣を超高速に振り、緑の炎を纏ったソニックブームを発生させた。

隣れ、ヴェーストは、真つ二つになり、そのまま炎に焼かれた!!

ヴェースト

『グギャー！！！』

ヴェーストは、断末魔を上げそして跡形もなく消え去った。

それを確認して、暁は、黄金騎士状態を解除した。

暁

『ふう〜。』

百代

『アキラ……。お前は一体何者だ？』

b e c o n t i n u e d

t
o

第6話 『悪魔』（後書き）

作者「とりあえず、悪魔との戦いいかがだったでしょうか？」

暁「俺、牙狼になっちゃった（-|-;-）」

作者「一応、説明するけど暁のcreateは、イメージしたものは全部作れます。しかも、オリジナルと同等もしくは、それ以上で。」

暁「イメージだけでそこまで作れるか？」

作者「何にあほ言ってるんだちみは。おまえには、

ありとあらゆる知識あるだろうが（-|-;-）」

暁「そういえば、そうだった。あまりに出て来ないからすっかり忘れてた。」

作者「しっかりしてくれよ主人公。」

暁「なんかこいつに言われるとなんかむかつく！」

作者「とりあえず、暁は、放置して・・・」

暁「放置するな！あ、一つ疑問が？」

悪魔倒すの物凄くあっさりしてないか？」

作者「それはですね。ヴァーストも弱くはなかったんですよ。

鉄心クラスだし。でもそれ以上に暁が強かったそれだけの

話です。」

暁「なるほど。」

作者「毎度おなじみ技の説明コーナー。」

技名

ゴルゴネイオン

光の複数の輪で相手を包み込み拘束する技

登場作品：カミカゼ エクスプローラー

技名

空破斬

剣風でソニックブームを起こし、敵を攻撃する技。

登場作品：スターオーシャンシリーズ

作者「さて次回、第7話『二人の少女』でまた会いましょう!」

暁「では、次回も活目してみよ!」

第7話 - ? 『二人の少女 前編』 (前書き)

今回は、ちょっと長くなるので、前後編ということ
まずは、京から。

この作品は、本日の15時頃に加筆修正致しました。

第7話 - ? 『二人の少女 前編』

百代

『アキラ・・・お前は一体何者だ?』

暁

『・・・近日中に話します。それで皆さんいいですか?』

鉄心

『かまわんよ。』

鉄心はそう言ったが、百代は、納得できていないが渋々頷いた。他のみんなも納得はいかなかったがそのときは、頷くしかなかった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

少女は、いつからか虐めを受けていた。

クラスの男子達は、物を隠したり、机に落書きしたりとネチネチとした間接的な虐め。

クラスの女子達は、無視。担任もその事を黙認しているようだ。

同じクラスの直江 大和は、その虐めが、悲惨なものだという事を知っ

ていてもやはり、自分もしくは、自分の仲間が虐めを受ける事は、耐えられない為、

静観しているしかなかった。

椎名 京は、物凄く無口だった。それに我慢強い。それが他のクラスメイトにとっては、

何を考えているか分からない。そう見えたのだろう。

俺には、唯、何を言われても耐えている寂しそうな女の子にしか見えなかった。

しかし、子供というのは、残酷だ。

自分がされたくない為、その標的を生贄にし、自分を正当化する。

発端は、京の母親が原因らしい。

京の母親は、元来の男好きだ。その為、複数の男性と関係を持っていた。

その事が父母達の間で噂になり、自然とその子供達に伝わったのだろう。

それが原因で、京は虐められていた。

クラス男子1

『椎名菌、どっかいけよ。』

クラス男子2

『椎名菌、もう学校来るなよ。』

そう言っつて、クラスの男子達が京に言葉の暴力を発している。

????

『……うるさい。だまれ。』

人を殺せそんな低い声である男子が言った。

京

『え?』

京が振り向くとそこには、肩位に髪が伸びた正に美少年の男の子が立っていた。

クラス男子1

『な、なんだよ。転校生。』

クラス男子2

『お前もこいつと一緒にいじめてるぞ。』

ちょうどその騒ぎを他のクラス全員が見ていた。

暁

『聞こえなかったか？だまれと聞いたんだ。』
殺気を放ちながら、そう言った。

クラス男子1

『ヒツ・・・!!』

暁

『ちょうどいい機会だ。お前達にいい経験をしてやろう。』

暁

『幻夢光!』

そういうと、京と大和・暁全員は、幻を見た。

それは、人に虐められる幻だった。

クラスから悲鳴や苦痛の声がした。正に阿鼻叫喚の図だった。

それから3分後

暁

『ジャスト、3分だ。』

パリーンという音共にその幻は消え、

クラス全員は、目を覚ました。

クラス全員

『はあ・・・はあ・・・』

全員は、額から冷や汗を掻き、ガクガクブルブルと震えている。

暁

『それがお前達がやっていることだ。』

暁がそう言うくとクラス全員ハッと暁の方向に顔を向けた。

暁

『それとな、親の事だろ？椎名本人には、関係ないじゃないか。

もう虐めも止める。もし、同じことをしてみる。

お前達に死よりもおそろしい苦痛をやるう。』

そういつて、クラス全員に冷酷な表情で言った。

もちろん、演技である。

クラス男子1

『し、椎名、ごめんな。』

クラス女子1

『椎名さん、ごめんなさい・・・。つらかったよね？』

京は、何が起こったのかわからなかった。

クラスメイトが一斉に謝りだしたのだ。

京が、戸惑っていると暁がそばにやってきて、

暁

『もう、大丈夫だ。だからもう我慢しなくていいからな。』

そう優しく言っつて、京の頭を優しく撫でた。

京

『も、もう我慢しなくていいの？』

暁

『ああ。』

その瞬間、京は、泣き始めた。今まで抑え込んでいたものがあふれた瞬間だった。

京

『アアア~~~~~(;O;)』

その後、その騒ぎを聞きつけ、担任がやってきて、校長室に連れて行かれたが、

今までの事を校長に話し、その結果、担任は、遠くの学校に飛ばされた。

ちなみに担任にも幻夢光をかけ、怖い幻を見て頂いた。

今まで黙認していたのだからそれくらい当然の罰だ。

そして、うちの新しい担任には、うちのメイドに教員免許を持っている

要 かなめ 由岐子ゆきこがなった。

- - - - -

京 side

今日もクラスの男子達から言葉の暴力を受けていた。

他のクラスメイトも見て見ぬふりだ。

私はジッと耐えた。

これはいつもの事だ。もう諦めている。

????

『・・・うるさい、だまれ。』

思わぬ人物が、私を助けてくれた。

名前は、天錠 暁。

先日転校してきた男子だ。

天錠君は、私に絡んできた二人及び他のクラスメイトを睨みつけ、何かをした。

その瞬間、クラスメイト達から悲鳴などが教室中から聞こえた出した。

私は、何かわからず呆気にとられていた。

3分後、天錠君の合図でみんなは、目を覚ましたようだった。それから冷酷な表情でクラスメイトに虐めを止めるように脅していたのだった。

他のクラスメイトは、恐怖の張りついた顔でコクコクと頷いていた。どうやら、3分間の間、物凄く怖い体験をしたのだろう。

クラスメイト達が、謝ってきた。

後で、天錠君に聞いてみたら、はぐらかされたが、直江君に聞くとうやら、私と同じ虐めを身を持って体験させたらしい。

天錠君は、一体何者なのだろうか？私は、考えてしまったが、次の瞬間、天錠君は、優しい笑顔で私の頭を撫でて、

暁

『もう大丈夫だ。だからもう我慢しなくていいからな。』

そう言わされた私の中で、我慢してきたものが、一気に噴出した。

親の前でも泣けず、人が周りにいるときにも泣けず、まして、

一人でいるときにも泣けない、
本当に苦しかった。
切なかった。
情けなかった。
辛かった。

いろんな感情が一斉に溢れ出す。
それから数分間、私は涙を流して大声で泣いた。

京 side out

京

『なんで、助けてくれたの？』
京が訊ねると

暁

『俺の自己満足だ。』
そういつて、ぶっきらぼうに言い、顔を背けた。

京

『ふふつ。』
京は、その顔をじっと見て笑っている。暁が恥ずかしそうに顔が少し赤いからだ。

暁

『何笑ってるんだ？』
暁は、ちらりこっちを見て、なんとも言えない困った顔で言った。

そして、京はいい笑顔で、

京

『助けてくれて、ありがとう……。』

思わず、暁は、京の笑顔に釘付けになった。それ程、京の笑顔は魅力的だった。

- - - - -

それから最初は、ぎこちなかったクラスメイトと京だったが、時間がたつにつれ、

京を無視した女子達も積極的に京と関わって仲良くなり、また、クラスの男子も自分達のしたことを反省し、京と関わるようになり、京も少し明るくなってみんなの誤解も解け、友達も増えたようだ。

京は、本当の意味でクラスの一員になることができたようだ。

それを見てか、他のクラスの子達も椎名を虐めなくなった。あと、学校全体にある噂が流れた事もその要因である。

その噂とは、

『人を虐めると怖い怖い魔王がやってきて、恐ろしい目に会う。』
なんと小学生らしい噂だ。

まあ、俺としては苦笑いするしかなかったがな(^^;) それとなぜかときどき京が俺を見る時、心なしか顔を赤らめて嬉しそうに

潤んだ目でみるのだが、

オイオイまさか・・・惚れられたか。まさかな。

後編に続く・・・

第7話 - ? 『二人の少女 前編』 (後書き)

作者「初の前後編となりました。」

暁「なんで前後編なんだ？」

作者「書いてる間に話長くなっちゃって、見づらくなるから
前後編に分けた。」

暁「なるほど。でも結構原作と違うよな？」

京助けるのリユウゼツラン防衛の後だろ？たしか。」

作者「んー、なんとか早めに助けたかったというのが本音だね。」

あと、作者も本当に虐められた事あるけど、あれはきつい。」

暁「ふむ。」

辺りが一瞬暗い雰囲気になった。

作者「・・・なんか、思い出したら泣けてきた(；O；)」

暁「泣くなよ(ー・・とりあえず、技の説明のコーナーいくぞ。」

作者「・・・うんO_T_T」

技名

幻夢光

相手に、3分間色々な幻を見させる技。(集団でもかけられる。)

ある意味、Get backersの美堂 蛮の邪眼のパワーアップ版みたいな感じ。

登場作品：オリジナル

暁「作者がかなり落ち込んでいるので

次回『第7話 - ? 二人の少女 後編』でまた会おうぜ！」

作者「・・・OTL」

暁「（- -;）（）」

第7話 - ? 『二人の少女 後編』 (前書き)

ということ、第7話後編です。

小雪メインの話になっております。

お知らせ

第7話前編を加筆修正しております。そちらもどうぞ。

第7話 - ? 『二人の少女 後編』

少女は、母親と暮らしていた。

父親は最初から一緒に住んでいなかった。

母親は、育児に疲れてしまい、そのストレスから

少女に暴力を奮っていた。俗に言う虐待だ。

少女の身体には、無数の痣と傷跡、服は薄汚れていた。

どうやらずっと同じ物を着ているようだった。

そのせいか、少女は周りから悪質な虐めを受けていた。

少女には、友達が一人もいなかった。

- - - - -

俺は、いつもの空き地に着いた。ここでいつも
風間ファミリーの面々と遊んでいたから。

ちょうど大和の姿を見つけ、手を振ろうとした時に
どうやら大和は、誰かと話していた。
見慣れない女の子。

大和

『定員オーバーだ。』

大和がそう告げると女の子は、絶望した顔で俯いてしまった。

俺は、とりあえず、大和に気づかれない様背後に移動し、そして

ゴチーン

大和の頭に拳骨を喰らわせた。
ちなみに手加減はしてるが痛いやつね。

大和

『い、痛つて、誰……！し、師匠！！』

大和は、一瞬驚いたが、まずいとばかりに顔を背けた。

暁

『こら、大和！お前この子に何言つた？』

有無を言わせない凄みのある声で、大和に言つた。

大和

『……俺は、ファミリーの定員がいつぱいだから入るのは無理と言つたんだ。』

それを聞くと、暁は、

暁

『大和君、君勝手に何言ってるのかな？』

大和

『イツ！す、すいませんでした。』

大和はその場に土下座した。

たしかに最近、京が入ったせいかな。そういうのにファミリー全員が敏感になつてる

のを分かるが……。

暁

『軍師的な立場は分かるが、これはみんなで決めることだろう。』

勝手に言ってるんじゃない！』

見知らぬ女の子も驚いていた。

暁

『お嬢さん、この馬鹿弟子が大変失礼な事を言ってますいませんでした。』

そう丁寧に言っつて、頭を下げた。

女の子は、頭を下げられ、どうしたらいいか分からないようだった。

暁

『俺の名は、天錠。暁。君の名前は？』

???

『小雪……。柏木 小雪……。』

少女は、おどおどしながらそう名前を答えた。

暁

『俺と友達になってくれないか？』

満面の笑顔で訊ねると、

小雪

『……。いいの？』

暁

『ああ！』

暁は、元気に答えた。

小雪は、自然と涙を流した。

小雪

『ヒック・・・ヒック・・・う、うれしい。うれしいよ、わーん
！！(・O・)(・)』

その後、小雪は盛大に泣いた。

小雪 side

その日私は、マシユマロを持って例の空き地に向かった。
目的は、その空き地でいつも遊んでるグループに入れてもらう為だ。
そして空き地に着いた。そして、そのグループの男の子に
勇気を振り絞って、グループに入れてほしいと声をかけた。
すると

大和

『定員オーバーだ。』

目の前が暗くなった。私は絶望した。

ここでも拒絶されたのだ。私は、下に俯くことしかできなかった。

ゴチーン

殴られる音がした。

顔を上げると先ほど話をしていた少年が、頭を抱えていた。

どうやら殴られたのは、この子らしい。

その子の背後にまた別の男の子が立っていた。

その子は、頭を抱えている子に怒っているようだ。

なんで？一瞬理解ができなかった。

その後、師匠と呼ばれた男の子は、私が話していた男の子に説教を
していた。

そして、

暁

『お嬢さん、この馬鹿弟子が大変失礼な事を言ってますいませんでした。』

そう言つて、師匠と呼ばれる男の子が頭を下げたので、

私はどうしていいかわからず固まってしまった。

男の子は、自分の名前を言った。天錠 暁君というらしい。

そして、私に友達になってくれといってきたのだ。

と、友達？私と？

私は、信じられず聞いてしまった。すると

暁君は、元気な声で答えてくれた。

嬉しい！！！！

嬉しい！！！！

これ夢じゃないよね？

現実なんだよね？

本当にうれしい！！！！

ツウ・・・

あれ？頬がなんか冷たい。

これは、涙？

私、泣いてる？

いつの間にか泣いていた。

それ程、今嬉しい。生きてて良かった。

小雪 side out

それから空き地で他のメンバーを待つてみたが、
やってこなかった。とりあえず、日を改めて紹介する事となり、
小雪は家に帰っていった。

大和

『なあ……？師匠？』

暁

『ああ……分かってる。』

小雪の服装そして、痣。それが気になっていた。
話を聞いていると、小雪は、隣町の学校に通ってるそうだ。

暁

『少し、調べてもらうか……。』

そういつて、指を鳴らすと背後にメイドの一人が膝を附いて現れた。

大和

『イイツー!!』

いきなり現れたメイドにびっくりしている。

暁

『南雲さん、今の聞いていた？』

南雲さん？

『は！』

暁

『お願いね？』

そついうと南雲さん？は、バシユンという空気音を残り、
今いた所から消えたのだった。

暁

『俺の考え違いじゃなければいいが……。』
『厳しい表情でそう呟いた。』

t o b e c o n t i n u e d

第7話 - ? 『二人の少女 後編』 (後書き)

作者「というわけで第7話後編でした。」

暁「なんか最後のほう新キャラ出てたな。」

作者「それは、次の話で紹介されます。」

暁「にしても思い切りまた原作ブレイクしてるねえ。」

作者「それは、ゲームしててあまりに小雪かわいそうなんだもの。

助けたくなるじゃん！」

暁「たしかにな。」

作者「あ、そうそう小雪と言えば次の話に彼らも出てきますよ。」

暁「ああ、あいつらね。」

作者「という事で、次回第8話 『新たなる仲間達』 でお会いしましょ。」

暁「では、またな(^o^)」

第8話 『新たなる仲間達』 (前書き)

という事で、あの人達+新キャラの登場です。

第8話 『新たなる仲間達』

暁 side

??

『失礼します。』

ドアが開き、一人のメイドが入ってきた。

メイドの名は、南雲なぐも 来夏らいか。

10人いるうちの1人だ。

主な仕事は、偵察・身辺警護。要するに昔で言う処の【お庭番】だ。

暁

『南雲さんか。どう？なんかわかった？』

来夏

『これを……。』

そういつて、あるファイルが渡される。

柏木 小雪の身辺などが書かれたファイルである。

俺は、黙ってそれを読むと言葉を失った。

それ程の内容だった。

柏木家は、小雪が生まれてまもなくは、両親ともにおり、生活はまともだったようだ。

父親は、建設会社の社長をしていたが、小雪が5歳になったときに会社が倒産。その後借金を作り行方不明になっていた。母親も最初は小雪を真面目に育てていたが、

借金問題や育児ノイローゼにかかり、
そのストレスから小雪に虐待をしていたそうだ。
最終的に育児から解放されたという願望なのか、
とうとう、育児放棄ネグレクトしてしまった。
その為、服はいつも同じで薄汚れており、
食事も満足にもらえてないらしい。
またその容姿の為、学校で虐められているようだ。

来夏

『ゆるせません・・・、子供にこんな・・・!!』

来夏は、手をギュツと強く握っている。

来夏が怒るのも無理はない。

俺自身もかなりの憤りを感じている。

暁

『南雲さん。彼女を見守ってもらえませんか？

何かあればすぐ助けられるように・・・』

来夏

『お任せください！失礼します！』

そういつて、暁の部屋から出た。

暁は考えていた。

これで学校以外は、助けられるが問題は・・・。

小雪は隣町の学校だ。

自分もおいそれと助けにいけない。

隣町に友人がいれば助けられるのだが・・・。

暁
s i d e

次の日曜日。俺は、隣町まで足を伸ばした。
新しい出会いがありそう、そんな気がしていた。

すると曲がり角で誰かとぶつかった。

ドン

???

『ッ!』

見たところ俺と同じくらいの少年が地面にお尻を突いていた。

暁

『ッ!すまない!大丈夫か?』

そう言っつて、手を差し出すと

???

『・・・ええ、大丈夫ですよ。』

そういつて、ニッコリと笑顔を浮かべ差し出された手を握って立ちあがった。

暁

『こちらの不注意だ、すまない。』

???

『いえ、こちらもよそ見していたのでお気になさらず。』
しゃべり方からしていいとこの子なのだろうとそう思った。

?

『若く、どこだ?』

誰かを呼んでいるようだ。

暁

『ん？』

？？

『どつやら、私の連れのようです。』

そう言つと先ほど人を呼んでいた男の子が近くに寄ってきた。

？

『探したぜ、若く。ん？そっちのやつは？』

？？

『今、ちょうどその角でぶつかりましてね。』

？

『ぶつかつてだと？怪我はないのか？』

そう言つて、品のいい少年の全身をくまなく見ている。

？？

『はは、大丈夫ですよ。軽くでしたし。こちらが悪いのですから。』

？

『心配させないでくれよ。若に何かあったら俺が怒られるんだからな。』

暁

『それじゃ、俺はこれで。』

そう言つて、立ち去るうとすると

??

『待つて下さい。よかったらお話しませんか?』

暁

『話しかく。別にいいよ暇だし。俺は、天錠 暁。君は?』

??

『これは申し遅れました。葵 冬馬と申します。』
『そういつて、ニツコリと笑みを浮かべた。』

?

『俺は、井上 準。まあ、若の付き人みたいなもんだ。』

『葵君に井上君ね、よろしく!』

『そういつて、笑顔で手を差し出した。』

二人は一瞬驚いたがすぐに笑みをこぼして握手を交わした。

これが、葵 冬馬と井上 準の出会いであった。

冬馬 side

葵 冬馬は、絶望していた。

尊敬する父が裏であんな事をしているなんて・・・

臓器売買・大手医療機メーカーからの賄賂。

医療ミスの隠蔽工作など人として許される物ではない。

しかし、今の自分には、それを暴露する勇気が無い。

自分はなんて弱い人間なのだ。

そんな事を考えていると情けなくなってくる。

そう言う事を考えながら道を歩いていると

ドン

どうやら廻り角で誰かにぶつかったらしい。

その少年は、肩まで長い髪をしており、いわゆる美少年だった。

その後、先ほどのやり取りがあり、準がやってきた処で

先ほどぶつかった少年がこの場を立ち去ろうとしたので、
思わず声をかけてしまった。

なぜ、私は、声をかけてたのだろう。

しかし、理由は分かっていた。

この少年ならこの絶望を救ってくれるかもしれない。
確証はなかった。でも、そんな感じがした。

しかし、この出会いが彼を絶望から救い出し、
今後、生涯の友と呼べる運命の出会いだった。

冬馬 side out

その後、場所を変えて、近くの原っぱへと3人で向かい、
話しをした。たわいもない世間話からお互いの事まで、
色々と話した。

暁

『葵紋病院の院長の息子と副院長の息子だったのか。』

一瞬二人の顔が少し嫌悪する顔になったが、すぐに戻った。
何だ？物凄く違和感を感じた。

冬馬

『そういつあなたも天錠グループの御曹司とは驚きました。』

準

『そこまで凄いなら護衛付けなくていいのか?』

暁

『一応、いるよ近くに。』

冬馬・準

『え?』

二人は驚いている。

暁

『呼ぼうか?』

冬馬

『い、いえ、結構です。』

準のほうもウンウンと頷いている。

それから少しまた違う話をしてからの事だった。

冬馬

『天錠君。一つ質問していいですか?』

暁

『なんだい?』

冬馬

『もし、自分が尊敬していた人が

自分の事を裏切る行為をしていたら

私は、どうすればいいんでしょうね……。』
冬馬は悲しそうな顔でそう言った。

なるほど、さっきの表情はこれだったのか。

暁は納得した。

暁

『とりあえず、俺の答えでいいか?』

冬馬

『はい……。』

暁

『ふむ、そうだな。その自分の事を裏切るとは、悪い行為という事か?』

冬馬

『はい……。』

暁

『悪い行為ならば止めさせるべきだな。』

冬馬

『それが難しい時は?』

暁

『そうだな。ありとあらゆる手段を使ってでも止める。』

一瞬冬馬も準も呆気にとられていた。

冬馬

『でたらめですね。』

そういつてフッと笑った。

暁

『そうかい?』

そういつて、口の端をニィとして釣りあげる。

暁

『それで、さっきの事だが、よかったら話してくれないかい?』

冬馬

『え?』

冬馬も準も驚いていた。

暁

『ここで知り合ったのも何かの縁。力を貸すぜ!』

冬馬

『しかし、関係ない天錠君を巻き込むわけには……』

暁

『何を水臭い事いつてんだ。俺達友達だろ?』

友達のピンチなんだ。助けるさ。』

冬馬は、不覚にもその言葉で涙が出てきた。

準

『わ、若!?』

冬馬

『あ……、あり……が……とう……ごぞいます……。』

冬馬は泣きながらそう答えた。

それから、冬馬が泣きやむのを待って、事情を聞いた。

暁

『父親が不正をねえ。鈴竹さん、います。』

澪

『はい、ここに。』

すると一瞬にして暁の背後にメイドが現れた。

冬馬と準はびっくりしている。

暁

『今の聞いていたよね？』

澪

『はい、聞いておりました。』

暁

『じゃ、お願いね？』

澪

『はー！』

シユン

澪は、その場から消えた。

冬馬

『今の人は？』

暁

『うちのメイドさんの鈴竹すずたけ 澪みおさん。』

準

『凄い人雇っているんだな。』

準は驚きすぎて呆然としながらそう言った。

暁

『彼女、最近入った子だから新人だよ。』

準

『新人であのLVかよ。』

冬馬

『本当に天錠君は、面白いですね。』

そう言っつて、笑っている。

暁

『そうか？それと天錠君つてのはやめにしないか？

なんかむず痒い。アキラでいいよ。呼び捨てで。』

冬馬

『そうですか、ならアキラ君で。』

準

『俺は、アキラで。』

暁

『そつか、俺もお前達の事名前で呼ぶわ。』

冬馬

『あらためて、私と友達になってくれませんか？』

準

『俺もおまえとなら友達になりたい。』

暁

『ああ、これからよろしくな。冬馬・準！』
再度手を差し出す。

冬馬

『ええ！よろしくお願いします。』

準

『ああ、よろしく〜』

そして交互に握手を交わした。

『上辺』だけの友達から『本当』の友達になった瞬間だった。

ピリリリ・・・

暁の携帯電話が鳴った。

暁は、二人に謝り携帯に出た。

暁

『もしもし、南雲さん？どうした・・・』

来夏

『大変です。小雪ちゃんが！』

暁

『！』

それは突然の知らせだった・・・

t o b e c o n t i n u e d

第8話 『新たなる仲間達』（後書き）

作者「ということと冬馬&準の登場です。」

暁「おお〜パチパチ」

暁「にしても新キャラが2人では〜。」

作者「仕方ないじゃん、南雲さんは、小雪の監視。

護衛役は絶対一人付かないといけない設定なんだもの。」

暁「聞いてね〜ぞ？」

作者「今、言ったからね〜。」

暁「開き直るな！」

作者「テへ」

暁「殺す……。」

作者「その剣は、待て、待ってくれ、いや待って下さい!」

暁「問答……無用！」

ザクッ!

作者「おお……う、じ、次回、第9話 『リュウゼツラン』でまた……

会いま・・・しょう・・・ガクッ」

暁「ではまたな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5712y/>

A.O.G ~ 真剣で代行者に恋しなさい! ~

2011年11月22日02時56分発行